

『教師としての在り方を考える』



京都芸術大学附属高校 校長

尽心塾京都伏見代表

すずき

かつじ

鈴木 克治 氏

先生方への願い

私が最初に勤めた学校は一四〇〇人も在籍しているマンモス校でした。先生も八十人ほどいて最初は驚きましたが、結局その学校には十四年いて相撲部の顧問をしていました。

あの頃は京都府でも校内暴力が吹き荒れた時代でしたが、力が余っているような生徒たちに、「学校や街の中で暴れるよりもルールのある土俵の上で戦いをしよう」と声をかけ、相撲部に入部させて共に汗を流しながら思い切り取り組んでいました。

ところが、昨今では教師の仕事はブラック企業などと言われたり、心の病になる教員も多くいると言われたりしています。こういったことも要因となり、若者の間では教師になりたいという人が減っ

あの人ほど人脈の広い学校の先生はいない」多くの
方がそんなふう口にする鈴木先生。学校の枠組み
を越えた発想と行動が多くの人を魅了する。異業種
の方々が共に学び、幸せなご縁をつなぐ場として
「尽心塾京都伏見」という有志の会を長年運営して
いる。本文は二〇一九年十一月のご講演より。

てきている現状もあります。

ところで、私は学校の先生の一番の問題というのが、

「この一か月間に教師以外の人に会いましたか？」

と聞いたときに、

「はい、会いました！」

と言える人がほとんどいないことだと思っています。

では、先生たちは何をしているのかというと、小学校の先生の場合なら土日に地域の行事で学校に来たり、教材研究をしたり、とにかく学校に来ているわけです。

そして、普段も夜の九時を超えても仕事をしているのです。中学校、高校では部活動もあり、学校と自宅の往復ばかりに時間を使っている先生が本当に多くいます。また、部活離婚とか部活別居とかいう言葉もあり、教員の子どもが、

「自分のお父さんお母さんは自分よりも学校の生徒の方を優先している。だから僕は見てもらえない」と思っている子どももいるわけです。

私は教育研究家の妹尾 昌俊さんという方の本が好きなのですが、その本の中に目からウロコの言葉がありました。こんな内容です。

「学校の先生は子どもに寄り添っていないとか、子どもと向き合っていないと言われるけれども、実はしっかりと時間をとって子どもと向き合っているのです。では、誰と向き合っていないのか。学校の先生は自分に向き合っていないのです」

私もまさにその通りだと思いました。けれども、もし教師の側を擁護するならば自由な時間も持たず、疲弊しているわけです。

こういう世の中だからこそ、私は先生が元気になることが日本に活力を与えることになるのだと考えています。そして今後は、先生たちが癒されたり元気をもらえたりするような活動に力を入れていきたいと考えています。

それで、そういう動きは退職してからでは遅いと思って数年前から尽心塾京都伏見という活動を始めています。最初は飲み会のような形でやっていたのですが、学びの機会も作り、「セミナー&懇親会」という形で年数回行なっています。

相撲交流の引率をして知ったメキシコと日本の交流

私は相撲部の顧問をしていました。それである年、相撲をする若者たちとメキシコの学校に行つて、相撲を通して交流をする機会をいただきました。行つてみると現地の生徒八百人余りの生徒が出迎えてくれました。

大変驚いたのは、「連帯感・約束・尊重・対話・友情」などの日本語が大きく書かれた垂れ幕のようなものがたくさん壁にかけられていたことです。また、「日本人は信頼ができる」という意味のスペイン語の言葉も掲げられていました。

私はメキシコがなぜこんなに離れた日本に対して親密であるのかを全く知りませんでした。それで聞いてみると、「日本人は時間を守る」「お釣りをごまかさない」「嘘をつかない」などと話されました。でも、その当時起きた秋葉原の連続殺傷事件のニュースをメキシコにいる人たちも知っていて、

「なぜ、あんな事件が日本で起きたのか。何かが日本から失われたんじゃないか」と危惧されていました。

さて、私はそのようなメキシコと日本の関係がどこから始まったのか知らなかったので調べていきました。すると、江戸時代初期の一六〇九年六月にフィリピンの臨時総督の任務を終えたドン・ロドリゴたち三七三名を乗せた船が、メキシコに帰る途中に嵐に遭遇し千葉県の御宿（おんじゅく）沖で座礁したということが分かりました。

五十六名が死亡し、残りの三一七名も寒さと恐怖に震えていたところ、御宿の村人たちはこれに大いに同情し、献身的に救助にあたつたのです。彼らは初めて見る異国の遭難者たちに衣服や食料を惜

しみなく与えたのでした。また海女たちが自分の体温で遭難者を温め救助したとも言われています。

トルコと日本の交流のきっかけとなったエルトゥールル号遭難事件の話は映画『海難1890』でも有名になりましたが、それと同じようなことがメキシコとの間にも起きていたのです。私はこのときまで知りませんでした。これが日本とメキシコの交流の始まりだったのです。

戦後には、メキシコは日本との平和条約の早期締結を国連に提案し、実際に二番目の締約国としてサンフランシスコ講和条約を批准しています。また、二〇〇九年にはその四百年の交流を記念して様々な記念事業が実施されました。

このような感動物語は日本の歴史上にたくさんあるのですが、教科書にはほとんど載っていません。けれども、今の時代はネットで検索したり、関連の本を読んで少し勉強すれば簡単に知ることができます。私は現場の先生方に、道德の時間などを使ってこのような子どもたちに教えてほしいと思っています。

偉人から学ぶ志教育

私の素晴らしいと思う偉人を少し紹介させてもらいたいと思います。

みなさんは幕末の武士で「無私の人物」と言えば誰のことを指すかご存じでしょうか。学校の歴史の時間にはあまり教えられません。山岡鉄舟です。

やまおか てつしゅう

江戸城の無血開城に大貢献をした人物として一般的に知られているのは西郷 隆盛と勝 海舟です。実は歴史には秘話があつて、確かに勝 海舟も西郷 隆盛も偉業を成し遂げたわけですが、幕末の最後は勝 海舟でさえも江戸城を燃やす勢いで攻め上がつて来た西郷 隆盛に対して交渉する場を持つことは難しかったわけです。

このとき動いたのが山岡 鉄舟でした。彼は何をしたのかというと、敵である薩摩の陣内にたった一人で命を懸けて乗り込んで、西郷と直接会見するのです。そして、

「是非、西郷先生に勝先生と会つてもらいたい」

とお願いをしたのです。

西郷は、そんな山岡 鉄舟の無私・誠実な姿勢に感銘し、勝 海舟と本格的な会談することに決めたとされています。そして、これが世界に類を見ない江戸城の無血開城につながつたと言われているのです。

鉄舟のような志に生きた人物は、たとえ教科書に載っていないなくても歴史上にたくさん存在したのです。こういう人物について大人はもつと子どもに伝えていかなければならないと思います。

それから、山口県の萩に行つたときのことです。萩と言えば吉田 松陰の生まれ故郷です。松下村塾や松陰先生のお墓などを拝見し、大いに感動しました。しかし、そこで心に残つたのは、松陰先生のお墓の前に建てられていた吉井 勇という歌人の石碑でした。そこに刻まれていたのは、

「萩に来て ふと思へらく 今の世を 救わんと起つ 松陰は誰」

という歌でした。私はこれを見て心が奮い立ったのです。

「今、この世の中に松陰のような人がいるのか」「松陰のような志をもつて動いている者はいるか」と訴えたこの歌にしばれました。

志と夢というのは違うと思っています。夢というのは、「私はくになりたい」「私はくをしたい」といったことだと思っています。一方、志とは「世のため人のために」という思いであると信じています。そして、このような志を育てていくことが今の教育に欠けているのではないかと思っています。

たしかに、学習指導要領の中でも志について語られるようになってきましたが、是非、昔の偉人からその志を学ぶべきであると思っています。この点については森 信三先生も次のように言っています。

「偉人に学ぶということは、現在もしそのような人々がこの激流のような時代に生きていたとしたらいかに行動するであろうかと考え、今日自分としていかに生きることが、それら超凡の偉人の心懐に一脈通うであろうかとの志念やむなきものがなくてはならぬでしょう」

縁を生かしていく楽しみ

さて、本居 宣長とその師である賀茂真淵かものまがちの関係を皆さんはご存じですか。宣長はある時、国学者と

して有名であつた賀茂 真淵が近くを通るといふ情報を知つて逢いにいったのです。

でも驚くことに、この時のたつた一回しか会つてないんです。後は手紙のやりとりなのです。「一期一会」といふ言葉は実はこの時生まれたのです。そして、この一期一会で宣長はあの『古事記伝』を完成させ、今や知らない人はいないといふ人物になったのです。

私の好きな評論家、鈴木 秀子さんは、「世の中で起こる現象は決して偶然ではなく一つひとつの出来事、人との出会いには必ず意味がある」と言っており、教育哲学者の森 信三先生は、「人間は一生のうちに逢うべき人には必ず逢える。しかも、一瞬早すぎず、一瞬遅過ぎない時に」といふ言葉を残してくれています。また、帝国ホテルの小林 哲也社長は、「小人は縁に気づかず、中人は縁を生かせず、大人は袖すり合う縁でも縁とする」と言っておられます。

もちろん人に出会い、関わることで面倒なことに巻き込まれることもあります。でも、多くの場合は素晴らしい出会いなのです。

数年前、知人の紹介により元読売ジャイアンツの名選手であり、犠打（バント）世界一の記録を持つ川相 昌弘さんとご縁ができました。

当初は、「ぜひ会いたいなあ」と思っていたわけですが、なかなか実現には至っておりませんでした。けれども、あるとき、「京都に行きますからぜひ会いませんか」と言われて、ようやく川相さんに出逢

わせてもらいました。会ってみると川相さんの人柄の素晴らしさがすぐに伝わってきて一瞬で惚れ込んでしまいました。

そこで私は「袖振り合うも他生の縁」ということで、この縁を生かそうと思いました。それで思い切ってお願いをして京都の小中学校の教頭二五〇人が集まる研修会で講演をしてもらうことになったのです。

また、京都市の教頭会の会長、近畿の教頭会の副会長を拝命され、全国の教頭会の大会に出なければいけなくなったことがありました。全国には二万八千人の小中学校の教頭先生がおられるのですが、その中心メンバーにも選ばれ、年十回ほど東京に行かなければいけなくなりました。しかも、ただ出席していたらよいというわけではなく、運営をする側としてやっていくことになり大変な一年になったわけです。

しかし私は発想を変えて、受け身ではなく「いつちよやるからには何かをしてやろう」と決心しました。それで、再び川相 昌弘さんにお願ひし、二千人集まる研修会のシンポジストの一人になつてもらいました。今では、「川相昌弘京都後援会会長」を務めさせてもらっています。

冒頭で申し上げたように、教員はどうしても学校の世界の中だけで過ごし、教員という枠組みを超えての「縁」を持つとうとしない人が本当に多いのです。そんな発想さえもない人がほとんどと言ってもよいかもしれません。

けれども、外に目を向けて自ら出会いを求めて行動していけば、こういったありがたい「縁」が学

校の教育活動につながっていくことがあるわけです。繰り返しますが、とくに若い先生方には休日などには異業種の人たちが集まる勉強会やボランティアに参加するなどして、「縁」を広げてほしいと願っています。そのことが教師として、人としての成長にもなりますし、何といたっても子どもたちへのより良い教育につながると信じています。

今後子どもたちに必要な力

今後、私たちは子どもたちをどのような人に育てる必要があるのでしょうか。

これについて文科省は「基礎的汎用的能力を高めましょう」と言っています。でも、この言葉を一般の人が聞いても分かりにくいでしょうし、教師でさえも理解しづらいです。

一方、経済産業省は違いますよね。「社会人基礎力」という表現でしつかりと押し出し、

「前に踏み出す力、考え抜く力、チームで働く力」

という三つを分かりやすく簡潔に伝えてくれています。

この言葉を見たときに、私は学校教育で今後何をしなければいけないのか考えさせられました。「タブレットやパソコンを使ってICT授業をすればいい」とか「アクティブラーニングをしなければいけないから、とにかくペアワークやグループワークをさせておこうか」などと目先のことだけ

を考えてはいけなわけです。また、「変化に対応できる力を育てなければならない」ということが言われますが、そんなことは当たり前のことです。

私はこれからの子どもたちには、「変化そのものを生み出す力」をつけていかなければいけないと思うのです。そのためにも、まず大人たちが自分の仕事をただこなしていくのではなく、その仕事を通じて何か新たな挑戦をしていこうとする姿勢が大事だと思います。そして、そういう姿を子どもたちに示していくべきだと思います。